

山々が色づき、晩秋の気配が濃くなってきた十月下旬、「G8北海道洞爺湖サミット・フォローアップ」なる国際会議の案内を受けた。暑かった夏の記憶が一気によみがえった。

今年七月、北海道洞爺湖で開かれた主要国(G8)首脳会議。主要な議題は環境問題、中でも地球温暖化は国際社会が協力して取り組むべき課題として取り上げられた。

私は発展途上国の健康問題を扱う国際保健が専門であり、「環境と健康」あるいは「気候変動と健康」といったテーマには興味を持っていた。

「健康とは環境への適応の尺度である」

こういう言葉が医療人類学や生態学の世界にある。字義に解釈すれば、健康とは周囲の環境への適応の度合いが高い状態、不健康とは低い状態。大ざっぱな定

長崎大熱帯医学研究所教授

山本 太郎

# 今を読む



やまもと・たろう 1964年竹原市生まれ。長崎大医学部卒業。外務省国際協力局課長補佐などを経て昨年からは現職。著書に「新型インフルエンザ」「ハイチ、いのちの闘い」など。長崎市。

義であるが、ある意味での失はいつも隠されている。真理を含んでいると思う。と言う医療人類学者もいる。

一方、環境は静的状態に自然のバランスを狂わす

## 「環境」再び国際課題に

### ローマクラブから40年

ある訳ではないというのにもことになる。自然を支配する自然な考え方だ。「人間」という言葉は自然の秩序環境の間の既存の関係ををかく乱させるとい言葉化させようとする試みは人と同義である」。この中間と環境の間に、いわば新「自然」を「環境」に置き換える、レネ・デュボスという「生態学的契約」をつくり出すものであり、このこの言葉もまた理解でき契約においては、かかる損る。

彼は、一九〇一年生まれのフランス系アメリカ人の環境問題に深い造詣を持つ感染症の専門家だった。そんな中で「健康とは環境への適応の尺度である」という言葉の意味をあらためて考えると……。

例えは人類は数百万年人口を抱える社会は存在し前、アフリカのどこかで他ななかった。適度な運動は生の霊長類たちと分かれ、長活習慣病を予防したに違いの間、狩猟・採集を農業とない。

「すべての技術革新は必ず自然のバランスを狂わす」という言葉は自然の秩序環境の間の既存の関係ををかく乱させるとい言葉化させようとする試みは人と同義である」。この中間と環境の間に、いわば新「自然」を「環境」に置き換える、レネ・デュボスという「生態学的契約」をつくり出すものであり、このこの言葉もまた理解でき契約においては、かかる損る。

これは一九六八年のことだが、この年はローマクラブが立ち上がった年でもあった。人口増加や環境破壊が続けば、資源の枯渇や環境悪化によって人類の成長は限界に達すると、ローマクラブは警鐘を鳴らした。それから四十年。当時の「人口増加による環境破壊」と今の「環境問題としての地球温暖化」、文脈は異なるが、「環境」は再び世界共通のテーマとなり、より深刻になっていく。

「すべて」の技術革新は必ず自然のバランスを狂わすことになる」と述べたことを紹介したが、「Think globally, Act locally(地球規模で考え、地域で行動する)」とも述べている。環境問題を考えるうえで、今あらためて一つの鍵になる言葉である。

や家畜の飼育といった革新させている時、聞いていた曲的技術を手にするが、それがスメタナの手による交響は同時に感染症という病を詩「わが祖国」の「ウルタ手にする」ことでもあった。東ヨーロッパ民主化の象徴だった「ブラハの春」が、ワルシャワ条約機構によるチェコスロバキア占領という悲劇的な結末を迎えた夜、同国の国営放送が流し続けたと伝えられる曲でもなる言葉である。